

第8回国際ガーデンEXPO開催

2014年10月15日～17日、ガーデン業界アジア最大級の展示会「第8回国際ガーデンEXPO (GARDEX)」が幕張メッセで開催された。同時開催の国際フラワーEXPO、国際道工具・作業用品EXPO、国際農業資材EXPO、国際次世代農業EXPOの関連4展と合せ、計1,470社が出展。来場者数も昨年に比べ14%増加の38,820人となった(10月20日来場者数速報値)。近年、新規出展社が多数見られ、特に農業資材・次世代農業EXPOへの出展社が増加している。



各業界の主要各社代表によるオープニングテープカット

当社は昨年に続き2回目の出展

当社ブースでは、2014年度新商品の園芸小袋肥料だけでなく、農業用20kg袋肥料も展示。昨年同様、協賛出展として清和肥料工業㈱、豊田有機㈱、ジェイカムアグリ㈱、昭和パックス㈱、㈱サンブルームの各社にご協力を頂いた。

今回のトピックスは当社ブースに海外企業や海外生産者の方の訪問が多く、商談申込みが増加した点だ。当社ブースには中国語・韓国語を話すことができる社員を配置。言語に対応できる事で海外の方がブース内に入り易い環境作りを行った事が功を奏したようだ。日本の厳しい肥料規格が海外の企業や生産者、ユーザーにとって安心・安全につながっており、ブランドとなる事を再認識した。

また、従来から懇意にさせて頂いているお取引先様も気軽にお立ち寄り下さり、多数の新規の方のご来場もあり、多くのご提案をさせて頂くことが出来てとても有意義な出展となった。

次世代農業の兆し

アジア最大級の展示会を名打つだけあって年々来場者数は増加しているが、特に中国・韓国等からの出展ブースが増えてきている。また、海外からの来場者も増加したように感じる。

今回の展示会で特に参加者の関心を引き付けたのは、次世代農業EXPOのエリアだ。次世代農業の出展会社は主にIT関連、植物工場資材メーカー、システムを提供する電気メーカーで、それぞれが提案する精密農業分野に足を止める来場者が多かったようだ。また、遊休地の利用だけでなく農作物を栽培しながら農場に太陽光発電パネルを設置し農産物収入以外でも売電で利益をUPさせる提案をされる電気メーカーのブースにおいては、特に生産者の方から熱心に話を聞かれているケースが見受けられた。

6次産業のブースにも多くの関心が集まり、現状の農業を強くするための次世代の技術や製品に生

(次ページへ続く)



協賛出展の各社ブースにも多数の来場者

産者や農業法人などの企業が強い関心があることも伺えた。

2015 年の展示会に向けて

次年度の展示会において、当社はガーデン EXP0 から農業資材 EXP0 に出展ブースを引越し、農業資材分野に特化した出展内容にバージョンアップを図る予定。来年度の更なる当社展示ブースにご期待頂きたい。

ご来場いただきました皆様、誠にありがとうございました。来年度当社に期待したい事などご意見を頂けましたら幸いです。当社出展にあたりましてご協力・ご協賛賜りました各社皆様におかれましてはこの紙面を借りまして、厚く御礼申し上げます。(特販部)



2014 年新商品の一部

伝統野菜の取組～加賀野菜

伝統野菜とは、長年作り続けられている間に、その土地の気候、風土、そして地域の人々の嗜好にあった野菜のこと。固定種に分類され、他の品種と交雑しないよう種を取り、現在まで繋げてきた品種である。味が良く、特徴を持つが、病気になり易く安定した収量・品質にする事が難しい弱点を持つ。近年では、消費者ニーズ（味・糖度・栄養価等）、加工・業務用ニーズ（多収、低コスト、日持ち等）に特化した特徴のある野菜への改良技術が発達。伝統野菜も栄養価等の機能が見直されている。

(株)フクムラ（石川県加賀市）社の紹介により、石川県かほく市の中山間地で伝統野菜である加賀野菜を生産する「久米農園」米林利榮氏に加賀野菜の特徴、ブランド化への取組についてお聞きした。同氏は、高い栽培技術はもとより、地場の青果会社と組み加賀野菜の独自商流を確立。農業経営者としても一目置かれている。



加賀太キュウリ

栽培している加賀野菜は、金時草、加賀太キュウリ、金沢春菊など。栽培が難しい固定種において、安定収量を継続する為には土づくりが重要。稲わら堆肥、米ぬか、おから、納豆菌等を混ぜた自家製造する「ぼかし肥料」、金時草、加賀太キュウリ等の元肥に根焼けをおこさない肥料として「トモエ化成」が欠かせないという。連作障害が起こり易い金時草さえ、ただの一度も病害発生した事は無いそうだ。

加賀太キュウリは、自家採取した種から育てる自根栽培を実践している。市場で一般に流通しているキュウリは「接ぎ木栽培」。病気に強く、収量が安定するが、風味は落ちると言われている。当品種は固定種、しかもキュウリの自根栽培による安定生産は、土づくり含めた高い栽培技術を要する。

金時草の種のルーツは、熊本県の水前寺菜。金沢の風土によって栽培された金時草は、特徴である葉裏の紫が鮮やかで、食感が柔らかく、風味も良いといわれている。加賀野菜のシンボルともなっている金時草の普及には、同氏の功績大きい。ハウスでの周年栽培を可能にし、一年を通して食べられるようになった。

加賀野菜は、同氏が所属する「加賀野菜保存懇話会（平成3年創設）」の地道な普及活動が功を奏し、伝統野菜として京野菜に次ぐブランド野菜へ知名度を上げている。一方、農家の高齢化・担い手問題により、希少化した品種も少なくない。郷土の先人たちが育んできた伝統野菜という文化を後世に伝えるため、次世代農家の育成だけでなく、地域との結びつき深め多様な消費者ニーズに対応すべく模索している。加賀野菜の更なる展開に期待したい。(名古屋支店 / 清野)



金時草

今回のGARDEXも出展者として3日間参加しました。多くの皆様に当社の商品をご紹介する事ができ、大変有意義な3日間でした。まだお越しにならなかった事のない方は、是非、来年のご来場をお待ちしております。

編集事務局：南部、助川